

Cranford における女性の コミュニティーの意義

木村 正子

1

Cranford (1853) は Elizabeth Gaskell が構想した女性のコミュニティーの物語である。*Cranford* の町は中高年の中流階級の女性たちで構成される希少価値的空間というだけでなく、ヴィクトリア朝イングランドの価値観を反映し、その価値観において周縁化されていた女性の文化や伝統を見直して次世代へ伝えるという役割においても示唆に富んだ存在と言える。語り手 Mary Smith によって届けられる *Cranford* の風情は、まるで博物館の展示物のような前近代的な遺物の紹介と、メロドラマ的な物語が大半を占める。それゆえ男性の英雄像が称揚される、いわゆるキャノンと呼ばれる作品を評価基準にするならば、他の家庭小説同様に本作品はヴィクトリア朝小説の主流から外れたものであろう。¹ ところが Gaskell はキャノンが認める英雄像というものに疑問を呈する作家である。短編小説 “The Sexton’s Hero” (1847) で語られるように、Gaskell は戦場での英雄の示威的行為よりも、人間愛を示すことに重点を置く (“there’s call enough for bravery in the service of God, and to show love to man, without quarrelling and fighting” [“SH” 109])。そしてこの精神を体現する存在として、当時のフィクションでは軽視されていた「母親」を前景化したのも Gaskell である。

だがこの母親像は、20 世紀初頭に出版された E. M. Forster 作 *Howards End* (1910) の中で揶揄の対象となって登場する。いわゆるヴィクトリア朝の「家庭の天使」の最後の世代である Ruth Wilcox は、“I am sure that if the mothers of various nations could meet there would be no more wars” (HE 99) と述べるが、彼女の言葉は男性優位社会の競争原理のもとにむなしく切り捨てられ、彼女が望んだ “a spiritual heir” (HE 107) の夢も潰える。Ruth の遺言どおり、彼女の遺産である

Howards End の屋敷は友人の Margaret Schlegel に受け継がれるものの、男性社会の価値観に共感する Margaret にとって、家は物理的な器 —“bricks and mortar, but not . . . the Holy of Holies” (HE 95)— に過ぎない。Ruth と家は相似的に前時代の遺物として扱われているが、もっと重要な問題は擬似的母娘の関係である Ruth と Margaret の意識の乖離である。これは現代のフェミニストたちと前世代の母親たちとの関係においてもあてはまることだろうが、娘は母親世代の伝統や遺産を拒絶するがゆえに、世代間の亀裂は容易に解消されない。男性支配の影響もさることながら、母親世代と娘世代の関係改善は双方の心理的な問題に深く関わっている。そして *Cranford* もまたこの問題と無縁ではない。

Cranford は一見男性支配に対抗しうる女性支配を可能にするコミュニティーを提示するように見える。ところが実際は、男性支配に抵抗するがゆえに逆にその支配に取り込まれる女性たちと、男性支配を受け入れるがゆえに女性の場を確保することがかなう女性たちとの矛盾を描き出しているのである。Nicola Diane Thompson が指摘するように、Gaskell の作品は一枚岩ではなく、Bakhtin の言う “the dialogic interplay of voices” を持つプロットが仕組まれていると言ってよい (4)。複数のボイスを持つことは、言葉を意味どおりに解釈するだけでなく、時には臨機応変に拡大解釈を認め、思考や行動の領域に幅をもたせるという点において、*Cranford* の精神を象徴する “elegant economy” (C 42) と符合する。

そこで本論では、この “elegant economy” という一種のゲームをキー・タームとして、女性のコミュニティーの存在意義と、次世代に伝えるべき女性の教育について検証したい。町の女性たちが「娘」として前時代から受け継いだものを拒絶することなく、「母」として次世代の娘たちに受け渡しをすることは、女性の役割が結婚、出産、子育てというプロセスを基にしつつも、生物学的に母親になることだけが「母」の役割ではないことを示す。むしろ social mothering (社会的な子育て) を町全体で行うことで、*Cranford* の女性たちは「社会的な母親」となり、いわゆるヴィクトリア朝的な「父に忠実な娘」というイデオロギー的な立場から解放される突破口になるのではないか。

2

Cranford における “elegant economy” とは、中流階級に属しながらその身

分を誇示するだけの資力を持たない女性たちが用いる方便である。男性社会での社会的地位を測る尺度としての金銭問題は“vulgar”(C 42)とみなされ、儉約が美德であることを称揚すべく“elegant”であると表現される。しかし率直に言うなら貧乏であることをごまかして対面を繕うための手段であり、町全体が過去の思い出にすぎる現実逃避の姿勢を持つと解釈されることが多い。実際 *Cranford* に対する批評を見ると、女性の理想郷としての存在を認めながらも、主要人物たちに実子がいなかったことを理由に、町には将来がないと言い切る批評家もいる (Auerbach 89, Stoneman 95)。また Miss Matty の生活を支えるのが行方不明だった弟 Peter Jenkins の帰還によるものであり (Flint 33)、このまま未婚で終わる彼女の人生の見通しは暗いと指摘する批評家もいる (Dodsworth 140)。確かに Deborah Jenkins が仕切る第一、二章における Cranford ならばそのように見えるだろう。だが Deborah の死後、リーダーの交代と共に Cranford が変化することからわかるように、実は変化を意識して作られた流動的な交流の場なのである。

Elizabeth Langland が指摘するように、“elegant economy”はヴィクトリア朝の社交ルールに基づくものであり、当時の父権制社会のシステムから派生したものである。1830年代に隆盛してきた“gentrification”に伴って各種の作法マニュアルが出版され、男女共に“polite society”のルールを身につけることに熱中していた。社会的地位は常日頃の行動に表れるとみなされ、そのマナーによって社会的なグループを形成し固定化させるのが目的である。その一環として女性たちの相互訪問のルールでは、決められた面会時間以外には女主人が不在であるという礼儀としての「嘘」が認められていたと記されている (Langland 124-25)。元来実践的な行動を指南するためのものが、徐々に装飾的なものになっていくのは想像に難くない。*Cranford* における“elegant economy”もまさにこの範疇に入るマナーであり、“our love for gentility”(C 45)や“the ‘genteel society’”(C 64)という表現において、“gentrification”の影響を読み取ることができる。

しかしながら、ヴィクトリア朝小説のコンベンションとして、「騙すのは女性」というイメージが確立しており、Gaskell 作品においても「嘘をつく」という行為は「女性的な悪癖」としてみなされることが多い (Kucich 128)。たとえ善意から出た嘘であっても、*Ruth* (1853) や *North and South* (1854) ではヒロインの嘘が、*Sylvia's Lovers* (1863) ではヒーローの嘘がそれぞれの人生において致命

的な打撃を与えるプロットが仕組まれている。また *Wives and Daughters* (1866) の Mrs. Gibson の二枚舌や Cynthia Kirkpatrick が用いる嘘が、彼女たちの道德面での信用を失墜させる要素となり、真実を語ることにこだわる Molly Gibson の誠実さの前に敗北を喫するのも事実である。*Cranford* においても、語り手 Mary の言葉 “a few evasions of truth and white lies (all of which I think very wrong indeed—in theory—and would rather not put them in practice)” (C 201-2) に見られるように、「嘘」に対しては懐疑的な姿勢が示唆されている。それゆえ *Cranford* が社交儀礼的な「嘘」をどのように処理するのかという点は非常に興味深い。

実際 *Cranford* では、「嘘つきは女々しく」、「正直者は男らしく」という構図が提示されるものの、コミュニティを去る男性たちはどう見ても勝利者には見えない。しかも “elegant economy” は元来男性が作り出した文化の産物でありながら、それを巧みに操作するのは女性で、その仲間入りを拒否されるのが男性であるというのは大なる皮肉である。「嘘をつく」ことによって無から有が生じ、言葉や物事の意味は特定のものに限定されないが、逆に真実を語ることにこだわる者は限定的な意味世界の中でしか生きられないということである。インドから帰郷した Peter Jenkins のみやげ話が人気を呼ぶのは、その話の真偽はともかく、彼が持ち込んだ「異国情緒」(“so very Oriental” [C 211]) のためである。この場に必要なのは、嘘を演じる側とそれを了解して受け取る側との共謀により、フィクションの世界で遊ぶ場を提供することであろう。これはまさにフィクションを書く作家と読者との共同作業と同じである。それゆえその「遊び」に参入できない人たち、たとえば正直者であるが、その遠慮のない物言いで女性たちを怒らせた Captain Brown や *Cranford* のやり方を虚飾的だとみなす Mr. Holbrook が事故死や病死という形でプロットから退場するのも当然の成り行きと言える。*Cranford* では正直に話すことが相手の弱点を指摘し恥をかかせることに繋がる場合、社交を円滑にするための嘘 “elegant economy” が不文律として公認されている。それを了解した上でこのゲームに参加できるか否かがこの町に住む資格の試金石となるだろう。つまり “elegant economy” は男性社会における “gentleman” の資質を問う検閲の役割をも果たし、女性はゲームによって男性を監視しているというわけである。

しかし “the Amazons” (C 39) と呼ばれる *Cranford* の女性たちは、その言葉が

喚起する戦闘的なイメージとは裏腹に、過去の男性の影に支配されているという弱点を持つ。彼女たちは亡き父や夫といういわば「不在の男性」によりアイデンティティが決定され (Croskery 208)、男性のエージェントとして存在する (Gillooly 884)。リーダー格の Deborah は女性の優位性を主張するフェミニストに見えるが、彼女の言葉は亡父の言葉を繰り返すに過ぎない。たとえば彼女が仕掛ける Captain Brown との文学論争がそうである。Deborah が、“Dr Johnson’s style is a model for young beginners. My father recommended it to me when I began to write letters” (C 48) と述べるように、この論争は女性対男性の対立ではなく、Deborah の亡父の影と Captain Brown という新旧における男性の意見の対立と見ることができるだろう。

同様に、“elegant economy” も Deborah の手にかかるると男性の行為の反復となる。郵便配達夫にチップを渡す場面で、Deborah は硬貨を一枚ずつ手渡ししながら、「これはあなたの分、これはジュニーの分」と列挙するが、まさに男性がその資力を誇示する “material displays” と同じである (Colby 67)。一方妹の Miss Matty はまるで自分が恥じ入るかのように、こっそりと郵便配達夫に硬貨を握らせる (C 171-72)。Deborah は父の影を背景に、男性の代理として行動する「娘」であり、男装ではないにしろ “a cravat, and a little bonnet like a jockey-cap” (C 51) を着用するあたりからも、彼女の英雄像は男性の姿をしており、それにあやかろうとする姿勢がうかがえる。Miss Matty もまた父権制度に従う「娘」であるが、彼女は姉という英雄像の背後に立ち、匿名のもとで、言葉よりも行為によって義務を果たすことに終始する (“my best work in the world was to do odd jobs quietly, and set others at liberty” [C 103])。注目すべき点は、Miss Matty が亡母の教えに従って行動していることであり、その価値観がやがて町全体の意識を変えていくほどの力を持つことである。この変化は破産した Miss Matty をめぐる処遇に顕著に表れている。

投資していた銀行が破綻し生活が立ち行かなくなった時、Miss Matty は自宅を改築して店を開き、茶の販売を始める。それは家庭という空間にしか場を持たなかった Miss Matty が商売という男性の領域に足を踏み入れることを意味する。まず自宅と店が隣り合わせになること、これは明らかに家庭と社会の境界が曖昧になる象徴であり、性別役割分担というイデオロギーへの挑戦であろう。しかし

Miss Matty の gentility を守るために誰もそれを非難する人はいない。それどころか、Miss Matty を陰ながら支援するための基金が募られ、匿名で町の人たちが援助を申し出るが、その中には成金の新参者ゆえ仲間入りが拒否されてきた Mrs. Fitz-Adam や Miss Matty の女中 Martha も含まれている。階級差をも超えたこの連帯は、一個人の英雄の登場を否定する代わりに、町全体が相互扶助をしていく social mothering の価値観を呈するようになる。

ここで“caring”を英雄的行為に加えるならば、Gaskell 作品においてそれは女性の母性特有の行為ではなく、男性にも参入が可能な行為になるだろう (Flint 29-31)。すると女性のコミュニティである Cranford は女性だけの特権的かつ理想的空間ではなく、男性の参入をも認める意味で、キャノンが提唱するジェンダーによる住み分けの境界を崩す画期的な存在になる。結果として Miss Matty の救済という大義名分が成り立つものの、階級差や男女の役割分担という社会規範を破ることに変わりはない。皮肉なことだが、もともと中流階級の女性の立場と生活を確保するための創意工夫が、逆に中流階級の価値観を解体する結果となったのである (Kucich 153)。しかし Cranford はその後も父権制度を受け入れ、決して男性社会に取って代わるシステムを提示するわけではない。また男性社会のように物質的な生産を目指す世界でもない。むしろ精神的な連帯によって物質生産を支える社会の基盤を構築する (Schor 131) という、まさにヴィクトリア朝の文化を「運ぶ」物語空間なのである。そうした Cranford に集まるのは、産業都市の商人の娘 Mary Smith、町医者と結婚したスコットランド貴族の未亡人、旅の奇術師 Brunoni 一家、インドから帰郷した Peter など、外部から異文化を持ち込む人たちである。Tim Dolin は、Cranford は誇張やほら話をも含む物語の市場であると指摘するが、さしたる出来事が起こらないこの町において、一番の刺激は物語とその語り方であろう (202)。

しかし Gaskell は無制限に gentility の文化の解体を認めるわけではない。ここで Peter の「嘘」に注目すると、少年時代の女装は認められないが、帰国後のほら話は認めるという矛盾が生じる。だがよく見ると、Gaskell が変装を認めるのは、*A Dark Nights Work* (1863) でのカーニバル・シーンや、短編小説 “The Grey Woman” (1861) に見られるゴシック要素という非日常的な空間に限られている。つまり異空間を設定して、フィクションの中で遊ぶというのが Gaskell

のスタンスである。それゆえ Peter 少年の服装倒錯は *Cranford* の日常生活の場面ではとうてい認められるものではなく、まして女性の貞操に対する世間の目が厳しい時代にあつて、姉の名誉を傷つけるような行為は Peter が立場上守るべき *gentility* のコードを逸脱している。Gaskell 作品はイデオロギー転覆の脅威は示唆するものの、決してそれを物語の中で実現させることはない (Kucich 136-42)。それゆえ Peter 少年の「いたずら」(“the practical joking,” “hoaxing” [C 93]) には、事実を歪めた者や社会規範を破る者が受けるべき罰が適用されている。これは当時のコンベンションに従った結果であり、Miss Matty がリーダーになった後もそれは変わらない。だが後年、一度は追われた Peter の帰郷を受け入れ、再びコミュニティの一員として迎える寛容さは Deborah の時代とは異なる。短編小説 “Lizzie Leigh” (1850) において、Anne Leigh は転落した娘を捜索し、父の法が許さない娘の罪を許して再び家庭に迎え入れた。男性社会の法律を変えることはできないが、聖書の中の「放蕩息子の帰還」の挿話を彼女なりに解釈して、娘を暗闇から救出する母親像は Gaskell の創造であり *Cranford* における *social mothering* もその流れを受け継ぐと言える。

3

さてこれまで検証してきた *Cranford* の女性たちの行為は、礼儀上の嘘や匿名性という特徴に彩られ、下手をするとアイデンティティの否定に繋がるような行為であるとみなされるかもしれない。これが母から娘への受け継がれる伝統というなら、やはり Gaskell 作品は男性優位を認め、父権制度に迎合した作品であるという証拠を与えることになるだろう。確かに Gaskell はイデオロギー転覆の脅威を示唆するが、あくまでもフィクション上での理想を描くにとどまる。だが表面上は男性支配を受け入れつつも、盲従することに疑問を呈しているのも確かであり、それは女性の場を問う “the woman question” や次世代の娘たちへの教育問題とも深く関わっていく。

Cranford において女性の教育の欠点を顕著に表すのは、世間知らずで家事以外のことを知らない Miss Matty よりも、知識を持ちながらその有効利用を知らない Deborah であろう。Deborah の言葉が父の受け売りであるように、彼女の知識は父が与える男性の教育をそのまま受け入れたものである。この場合、女性

が男性と同じ教育を受けることの是非は別にしても、Deborah は牧師であった父の仕事に補佐することができるが、女性であるがゆえに父の地位を継承することはできない。加えて父を精神的に支えることもかなわないのである。というのも、父が娘に求めたものは出奔した息子の代理として仕事をしてくれる存在であり、心のよりどころは常に妻と不在の息子に向けられていたからである (Wolfe 164)。これは後期の中編小説 *Cousin Phillis* (1863) のヒロイン Phillis Holman にも見られることだが、父が与える教育を何の抵抗もなしに受け入れた娘は、その知識を活かす場所も術も教えられず、ただ知識のみを保有する倉庫と化している。語り手 Paul Manning が繰り返し言及するように、Phillis が父から学んだのは「現在」には役立たない “dead languages” (CP 240) である。そして目下父が興味を持っている dynamics についての話し相手は Paul であって、Phillis の役割はそれに関する本を「運ぶ」だけである — “Phillis was sent for the book on dynamics, about which I [Paul] had been consulted during my first visit” (CP 249)。そして同性でありながら、同じ知識を共有しない母との間は乖離してしまい、Phillis は、年頃になってもまだ赤子と同じ扱いをする両親から精神的自立を得るのに、外部との接触による経験 — 恋 — を必要とする。失恋し、父から「墮落」した (“to spoil her peaceful maidenhood” [CP 307]) と責められる Phillis に新たな行動指針を与えるのは女中の Susan であり、実母との乖離は最後まで解消されずに終わる。だがこれを境に Phillis は世話をされる「娘」から、他人の世話をする「母」への道を歩み出すことが示唆されるゆえ、Phillis には救いがあると言えるだろう。一方父との決別を経験しなかった Deborah は最後まで「娘」のままに齢を重ねる。Wolfe が興味深い指摘をしているが、Deborah のフェミニズム主張は闘争的な態度で示されるものの、それは男性支配に対してというより、父の愛情をめぐって母や弟に対する宣戦布告であると解釈できる (163)。つまり男性社会の競争原理を真似て強がっていても、Deborah の意識は「子」としての範疇にとどまり、「大人」になりきれないままなのだ。

こうした女性に対する教育に関しては、Gaskell と同時代の Sarah Ellis も懸念を抱いていた。コンダクト・ブックの作者として有名な Ellis は、女性の場合を家庭であると位置づけ、ヴィクトリア朝のイデオロギーに服従する女性像を支持したとして、現代のフェミニスト批評家の間では攻撃の的になりがちである。し

かし Ellis は決して「女性イコール家庭人」と断言しているわけではない。*Education of the Heart* (1869) の中で Ellis は、男女それぞれに創造的な持ち場——“their appropriate place in creation” (17)——があると考える。コンベンションとして男女の場が分離されているならば、ないものねだりをして嘆くよりも、まず女性には自分の場を確保することが先決だと主張する。つまり男性と同じものを望んでも、現在の状況が許さないのであれば、次世代の娘たちに希望を託し、今はその足がかりを作るために踏み出そうと呼びかけるのである (Ellis 17-18)。フェミニストたちは、ジェンダーによる境界を認めること自体に抵抗があるのだろうが、むしろ違いを受け入れて、英雄の背後に立って持ち場を固めるのも作戦の一つである。Patsy Stoneman は Elaine Showalter の指摘に言及しながら、男性の歴史は数え切れない無名の女性の歴史に支えられてきたことを忘れがちであり、それに気づいた時、我々の視点や解釈も変わってくるだろうと指摘する (11)。また George Eliot の成功は男性ボイスを受け入れたからであるという Langland の主張 (134) や、Eliot の作品の根底には Harriet Martineau や Margaret Oliphant といった先輩女性作家の軌跡が見られるという Elizabeth Jay の主張 (Langland 141) も、家庭小説作家の評価の見直しを反映しているだろう。

それでは具体的に女性はどうのように自分の場を確保するのだろうか。Mary Smith が Cranford を訪れる時に必ず針仕事を持参するように、この町の女性たちは読書や運動にあまり時間を使わない。まして「書く」という仕事は男性の領域であるから、女性でこれに従事するのは Deborah のみである。だがその Deborah がよこす手紙は凝った文体で書かれるゆえ、妹には全く解読不可能であるというのはどうか。一見 Miss Matty の教養不足を戯画化しているようだが、Mary が Deborah の文章を“sesquipedalian” (C 90) と揶揄するように、書き手の意図が伝わらない手紙はコミュニケーション手段としての用をなさない。これは Deborah 誕生の折に祖父から届いた手紙も同様である。祖母は足を挫いたために臥せっており、手紙を書くことを禁じられていた。だが“His wife did not write”と書かれた紙面の下部に“T.O.”と補記があり、裏面には新米の母親にとってはありがたい注意事項が簡潔に述べられてあった (C 87)。祖父が書いた訓戒は装飾的で難解なだけで、祖母の措置と指示の方が的確で実践に即したものであることがわかる。もちろんこの挿話では母親の母性的な愛情が協調されるのだが、同

時に、書くことを禁止された女性が、ある種の「嘘」を使ってその機会を見出す点にも注目したい。病床の母の姿はまさに装飾的であるが、彼女が方便としての「騙し」を使う行動は非常に実用的である。しかもこの女性の行為における二面性は決して批判的にはならない。逆に、真っ向から男性のやり方に反抗するより、隙間を狙うことが時として有効な作戦であることを証明するものだろう。

確かにヴィクトリア朝のイデオロギーとしては、女性は装飾的で男性は実務的である。ところがものを書くとなると、男性作家が装飾的なものを好み、女性作家は実用的なことに目を向けるという逆転現象が起こる。その矛盾にもかかわらず、女性作家は実用的な内容を書くゆえにキャノンの対象外に置かれるわけである。Henry James は *Wives and Daughters* について評した時、「装飾的な」Cynthia Kirkpatrick よりも「実用的な」Molly Gibson を中心にしたために、単なる「少女の日常生活の記録」で終わったと述べている (*Critical Heritage* 465)。言葉に対してその意味に縛られない自由な解釈を認めるという点では、Cynthia やその母親のふるまいも *Cranford* の “elegant economy” と無縁ではない。だが “elegant economy” はあくまでも中流階級の礼儀作法に属するものであるから、私情で意味を改変するのは異なる。Gaskell は正直と忠実が必ずしも結びつくとは考えていない (Kucich 132) が、嘘と忠実が結びつくにはそれなりの理由が必要だ。Cynthia の外見に惹かれ、彼女の本心が浅薄なことに気づかない Roger Hamley の恋は土壇場で裏切られる。しかし身分の低い女性と秘密裏に結婚した兄の Osborne は、家族を騙し続けたものの、後にその愛情による結びつきを認められる。兄弟の父親である Mr. Hamley は純粋な血筋と古い家柄を誇示していたが、その彼が息子とフランス人女中との混血児を跡継ぎとして認めることは、家訓に背き異文化混合を認めることを意味する。しかもそれによって家系の存続が可能になるのだ。この点から考えると、*Cranford* の “elegant economy” がいかに男性的かつ装飾的な文化のパロディーであるかを示唆するものであろう。装飾的役割を担っていた女性たちが、「嘘」を用い、時代とニーズに合わせてライフスタイルを解釈し直すのである。これは町を過去の遺物として風化させない最善の方法ではないだろうか。

もとより *Cranford* の女性たちは装飾的な存在であるが、中流階級の家庭を見ればどこも男性不在である以上、女性たちは主人となって、召使との労使問題等

の家政管理をしなくてはならず、おのずと「実務的」にならざるを得ない (Langland 123, Colby 70)。Miss Matty の記憶を通して語られる父母の夫唱婦随のイメージにより、妻の内助の功が強調されがちだが、未婚の Miss Matty にとって、母親の人生をそっくり真似ることは無意味である。これは Miss Matty が受けてきた教育が次の世代にはもう通用しない (“there was nothing she could teach to the rising generation of Cranford” [C 186]) という事実とも無関係ではない。過去をそのまま繰り返すことは、現在や未来の役に立たないということを認識することで、Miss Matty は Deborah よりも「大人」になれたと言える。実は Miss Matty にも結婚を考えた恋人がいたが、身分違いの結婚に反対する父と姉に逆らえずに諦めた。その選択を悔いてはいないものの、階級の誇りや体面が自身の幸せに繋がらないことを経験した彼女は、Jenkins 家のルールを曲げて女中 Martha の恋愛を認め、Lady Glenmire と町医者との結婚の後押しをする。つまり彼女は、過去にしがみつき家父長制度の犠牲者として自己憐憫にふけることなく (Auerbach 85)、自身の失敗を他人が繰り返さないように手を差し伸べるのである。

Gaskell の先輩作家である Jane Austen もまた、*Persuasion* (1818) の中で身分制度の犠牲者 Anne Elliot の生き方を描いているが、ヒロインの対照的な選択を見れば、両作家のスタンスの違いは明らかである。*Persuasion* では昔の婚約者が海軍にて昇進し、ヒロインに再度求婚するという男性主導型ロマンスでの大団円が用意されている。一方 *Cranford* ではロマンス・プロットは副次的な人物に譲り、Miss Matty は 30 ～ 40 年ぶりに昔の恋人に再会して、二人を隔てる距離を再認識するという乖離のプロットに導かれる。若い頃は身分制度の壁によって阻まれた二人であるが、今や異なった文化を背負う二人が互いのライフスタイルを理解し合えない以上、二つの文化が融合する機会は見出せない。ある一つの基準に統一することを強制せず、違いを認めることで各個人の生き方に選択の余地を与えるなら、Gaskell が提示する未婚女性の生き方は、必ずしも惨めさと結びつくわけではない。

Austen は階級による社会環境やライフスタイルの「違い」を認めると同時に、ヒロインが自分の個性を活かすべく階級を移動することを認めた。この文学上の母の傾向を受け継いだのは George Eliot であり、*Middlemarch* (1871-72) の

Dorothea が夫の遺言を反故にして地位も財産もない男性との結婚を決意する点にそのエコーが見られる。Dorothea はその理由として、“I never could do anything that I liked” (M 669) と述べている。つまり彼女が属する環境では自分のやりたいことが何も実現できなかったという経験をふまえ、“something better” (M 670) の実現を目指して新たな環境に赴くわけである。この結論は、個を主張するよりもコミュニティーの発展を願い、人々の意識改革に焦点をあてる Gaskell とは方向性が異なる。確かに *North and South* でのヒロインの選択は Austen や Eliot の作品と近いが、Margaret Hale の行動指針が social mothering ならば、Gaskell が示す方向性にぶれは生じていない。

4

このように *Cranford* は決して排他的な場ではなく、むしろオーソドックスなものを残しつつ、同時に異文化混合を認める場である。Louise Henson は、これが Gaskell にとっての「進化」のプロットであり、住民に必要なものは生まれながらにしての身分や財産ではなく、その環境に適応できるか否かという点にあると述べる (24-25)。精神面で階級差を越えるというなら、Miss Matty の精神を受け継ぐのは女中の Martha であり、その次は Martha の娘 Matilda であろう。逆に家系や血筋にこだわる父権制度の視点で見ると、*Cranford* に未来はない。だが女性の連帯としての *Cranford* は、次世代の娘たちを育てる「社会的な母親」たちのコミュニティーである。守るべき対象と育てるべき対象を得た「娘」は、次世代のために「母」となって町を支えていく。*Cranford* が示唆する「進化」とは、次世代を育てる母親の価値観によって支えられていると言えるだろう。それは女性だけが持つ特有の資質ではない。男女の役割分担という決められた枠組みの中で、女性たちが与えられた場を確保し、それを現場にふさわしいものに仕立て直していく工夫から生まれたものである。*Cranford* の女性たちが受け継ぐものは、変化を容認し、違いを認める意識である。それゆえに *Cranford* は「理想郷」としてのポジションを確保できるのだ。

注

- 1 Nicola Diane Thompson によれば、ヴィクトリア朝女性作家においては、まず男性のボイスで書いた George Eliot ありきで評価される。そして現代においても、その Eliot を先駆者として仰ぐ Virginia Woolf の意見 — 「居間から発信される女性の感情の物語は取るにたりないものであり、戦場の物語にはとうていかなわない」 — がキャノンの評価基準となって受け継がれていると指摘している (Thompson 8-10)。しかし Thompson は、過去の評価基準を見直しキャノンの背後に捨て置かれた女性のボイスに注目している。

Works Cited

- Auerbach, Nina. *Community of Women*. Cambridge: Harvard UP, 1978.
- Austen, Jane. *Persuasion*. 1818. Ed. John Davie. Oxford: Oxford UP, 1988.
- Colby, Robin B. “Some Appointed Work to Do”: *Women and Vocation in the Fiction of Elizabeth Gaskell*. Connecticut: Greenwood, 1995.
- Croskery, Margaret Case. “Mothers without Children, Unity without Plot: *Cranford*’s Radical Charm.” *Nineteenth-Century Literature* 52 (1997): 198-220.
- Dodsworth, Martin. “Women Without Men at *Cranford*.” *Essays in Criticism* 13 (1963): 132-45.
- Dolin, Tim. “*Cranford* and the Victorian Collection.” *Victorian Studies* 36 (1993): 179-206.
- Easson, Angus, ed. *Elizabeth Gaskell: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1991.
- Eliot, George. *Middlemarch*. 1871-72. Ed. David Carroll. Oxford: Oxford UP, 1989.
- Ellis, Sarah. *Education of the Heart: Woman’s Best Work*. 1869. Vol. 6 of *Female Education Considered: Nineteenth-Century Britain*. Ed. Setsuko Kagawa. Bristol: Thoemmes, 2002.
- Flint, Kate. *Elizabeth Gaskell*. Plymouth: Northcote, 1995.
- Forster, E. M. *Howards End*. 1910. Ed. Oliver Stallybrass. Harmondsworth: Penguin, 1989.
- Gaskell, Elizabeth. *Cranford / Cousin Phillis*. Ed. Peter Keating. Harmondsworth: Penguin, 1986.

- ____. "Lizzie Leigh." 1850. *Cousin Phillis and Other Tales*. Ed. Angus Easson. Oxford: Oxford UP, 1981.
- ____. "The Sexton's Hero." 1847. *The Moorland Cottage and Other Stories*. Ed. Suzanne Lewis. Oxford: Oxford UP, 1995.
- Gillooly, Eileen. "Humor as Daughterly Defense in *Cranford*." *ELH* 59 (1992): 883-910.
- Henson, Louise. "History, Science and Social Change: Elizabeth Gaskell's 'Evolutionary' Narratives." *Gaskell Society Journal* 17 (2003): 12-33.
- Kucich, John. *The Power of Lies: Transgression in Victorian Fiction*. Ithaca: Cornell UP, 1994.
- Langland, Elizabeth. "Women's Writing and the Domestic Sphere." *Women and Literature in Britain 1800-1900*. Ed. Joanne Shattock. Cambridge: Cambridge UP, 2001. 119-41.
- Schor, Hilary M. *Scheherezade in the Marketplace: Elizabeth Gaskell and the Victorian Novels*. New York: Oxford UP, 1992.
- Stoneman, Patsy. *Elizabeth Gaskell*. Brighton: Harvester, 1987.
- Thompson, Nicola Diane. "Responding to the Woman Questions: Rereading Noncanonical Victorian Women Novelists." *Victorian Women Writers and the Woman Question*. Ed. Thompson. Cambridge: Cambridge UP, 1999. 1-23.
- Wolfe, Patricia A. "Structure and Movement in *Cranford*." *Nineteenth-Century Fiction* 23 (1968-69): 161-76.

(同志社女子大学非常勤講師)

Abstract

Cranford as a Women's Community

Masako KIMURA

Cranford (1853) depicts a fictional community conceptualized by Elizabeth Gaskell. It is a women's community, not only because the dominant group of the town consists of middle-class women called "the Amazons," but also because it holds women's ethics that are marginalized in the patriarchal culture. In this paper, two points will be discussed. First, in creating the women's community, Gaskell starts with adaptation of male culture. Cranford's tenet, the "elegant economy," comes from the social manners of Victorian middle-class, but in the course of the story, women remodel it to be apt for the circumstances. The processes of change prove that *Cranford* is a site of fluidity, and not a site of anachronism as many critics have often mentioned. Second, Gaskell questions about woman's identity by male existence, and explores about what education each woman needs for her own life. This will lead to reassessment of the problem of the rupture between Victorian dutiful daughters and deserted mothers, and also the problem of abandonment of maternal legacy. *Cranford* finally shows that the society moves toward heterogeneity beyond gender, labor, and class separation. Women's ethics are effective here, because their driving force is social mothering by joint reliability instead of a struggle for the existence of the male society. Ostensibly, Gaskell's writing serves the patriarchy, but the latent power of women is so strong that it may secretly eradicate the foundation of the present system.

